

## 皇居においてマレーズトラップで捕獲された タマバチ上科 (膜翅目)

阿部 芳久

九州大学大学院比較社会文化研究院生物多様性講座

〒819-0395 福岡市西区元岡744

E-mail: y\_abe@scs.kyushu-u.ac.jp

### Cynipoidea (Hymenoptera) caught using Malaise traps in the Imperial Palace, Tokyo

Yoshihisa Abe

Biosystematics Laboratory, Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University. Motooka, Nishi-ku,

Fukuoka 819-0395, Japan

E-mail: y\_abe@scs.kyushu-u.ac.jp

**Abstract.** Two species of Cynipoidea, i.e., *Diplolepis japonicus* and *Ibalia japonica*, were collected using Malaise traps in the Imperial Palace, Tokyo. The former is recorded from Tokyo Metropolitan Prefecture for the first time.

**Key words:** Cynipidae, Ibalidae, *Diplolepis japonicus*, *Ibalia japonica*.

#### はじめに

現生のタマバチ上科は、ゴール (gall) を形成する、あるいはそれに住み込み寄生をする植食性のタマバチ科と、他の昆虫に寄生する捕食寄生性の四つの科から構成される (Ronquist, 1999). 皇居の動物相調査の一環として膜翅目昆虫についても調査がなされ、マレーズトラップによって採集されたタマバチ上科の標本を同定する機会が筆者に与えられた。前回、皇居で1996から1998年にかけて行われた同様の調査では、ヒラタタマバチ科のニホンヒラタタマバチ *Ibalia (Tremibalia) japonica* Matsumura, 1912が1♂記録されただけであった (小西・前藤, 2000). 今回の調査で得られたタマバチ上科について報告するとともに、それらの生物学的情報についても、前回と同様に簡潔に記述する。

#### 材料および方法

皇居においてマレーズトラップで採集されたタマバチ上科の乾燥標本を実体顕微鏡下で観察して同定した。

#### 結果と考察

##### ヒラタタマバチ科 Ibalidae

ニホンヒラタタマバチ *Ibalia (Tremibalia) japonica* Matsumura, 1912

道灌新道: 1♀ (25. v.–1. vi. 2010)

本種は前回の調査でも採集されていた (小西・前藤, 2000) ので、皇居に定着していると考えられる。ヒラタタマバチ科の寄主は木本を食べるキバチ科の幼虫である (Ronquist, 1999) ことから、皇居内の森林が本種の生息を可能にしているであろう。本種は明治神宮でも採集されている (渡辺, 2013) ので、東京都内の森林が保存されている地域に広く棲息すると考えられる。

## タマバチ科 Cynipidae

ニホンノイバラタマバチ *Diplolepis japonicus* (Walker), 1874

道灌新道：1 ♀ (13. iv.–20. iv. 2010)

Yasumatsu & Taketani (1967)および湯川・榎田(1996)によれば、本種の生活環は以下のとおりである。春、ノイバラの新梢先端部の芽に雌成虫は産卵する。やがて金平糖のような形をしたゴールが主に葉に形成され、成熟したゴールは入梅の頃から地面に落下する。地上のゴール内で夏、秋、冬を過ごし、翌春、本種の成虫が羽化・脱出してくる。

本種は河川敷のような開放的な環境下のノイバラにゴールを形成することが多い。本種の地理的分布は局所的である。皇居においては、人手の入る明るい環境のノイバラに依存していると推察される。本種成虫の性比は雌に偏っており、雄成虫の割合は3パーセントで、雌成虫は同種の雄成虫と出会っても関心を示さず、交尾せずに産卵することが知られている (Yasumatsu & Taketani, 1967)。ヨーロッパ産の同属種 *Diplolepis rosae* (L.)でも雄成虫の割合は低く (Askew, 1984)、この種では *Wolbachia* という細胞内共生微生物の感染により性比が雌に著しく偏ると推察されている (Plantard *et al.*, 1999)。

## 謝 辞

筆者に貴重な機会を与えてくださった篠原明彦博士 (国立科学博物館) および小西和彦博士 (北海道農業研究センター) に厚くお礼を申し上げる。

## 引用文献

- Askew, R. R., 1984. The biology of gall wasps. In: Ananthakrishnan, T. N. (ed.), *Biology of Gall Insects*. pp. 223–271. Oxford & IBH publishing, New Delhi.
- 小西和彦・前藤 薫, 2000. 皇居のヒメバチ上科, ヤセバチ上科, カギバラバチ上科およびヒラタタマバチ科. 国立科学博物館専報, (36): 307–323.
- Plantard, O., J.-Y. Rasplus, G. Mondor, I. Le Clainche & M. Solignac, 1999. Distribution and phylogeny of *Wolbachia* inducing thelytoky in Rhoditini and ‘Aylacini’ (Hymenoptera: Cynipidae). *Insect Molecular Biology*, 8: 185–191.
- Ronquist, F., 1999. Phylogeny, classification and evolution of the Cynipoidea. *Zoologica Scripta*, 28: 139–164.
- 渡辺恭平, 2013. 明治神宮のヒメバチ科, コマユバチ科およびヒラタタマバチ科. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査委員会 (編), 鎮座百年記念第二次明示神宮境内総合調査報告書. pp. 348–352. 明治神宮社務所, 東京
- Yasumatsu, K. & A. Taketani, 1967. Some remarks on the commonly known species of the genus *Diplolepis* Geoffroy in Japan. *Esakia*, (6): 77–86, + 4 plates.
- 湯川淳一・榎田 長, 1996. 日本原色虫えい図鑑. 826 pp. 全国農村教育協会, 東京